

(旧・「京大上海センターニュースレター」)

京都大学経済学研究科東アジア経済研究センター

2010年5月10日

目次

-
- 「中国経済研究会」のお知らせ
 - 読後雑感：2010年 第8回
 - 【中国経済最新統計】(試行版)
-

「中国経済研究会」のお知らせ

2010年度第2回目(通算第9回目)の中国経済研究会は下記の要領で開催されますので、大勢のご参加を心待ちにしています。

記

時 間： 2010年5月18日(火) 16:30-18:00
場 所： 京都大学吉田キャンパス・法経済学部東館3階第3教室
報告者： 高中理(遼寧省政治経済学院省情研究所所長)
テーマ： 「中国重工業基地遼寧省における低炭素経済発展の戦略と政策」

注：本研究会は原則として授業期間中の毎月第3火曜日に行います。2010年度における開催(予定)日は以下の通りです。

前期：4月20日(火)、**5月18日(火)**、6月15日(火)、7月20日(火)
後期：10月19日(火)、11月16日(火)、12月21日(火)、1月18日(火)

(この件に関するお問い合わせは劉徳強(liu@econ.kyoto-u.ac.jp)までお願いします。なお、研究会終了後、有志による懇親会が予定されています。)

【予告】

第10回 中国経済研究会

時 間： 2010年6月15日(火) 16:30-18:00
場 所： 京都大学吉田キャンパス・法経済学部東館3階第3教室
報告者： 大西広(京都大学経済学研究科教授)
テーマ： 「農奴解放前チベット農奴制の生産関数推定による農奴解放効果の研究」

第11回 中国経済研究会

時 間： 2010年7月20日(火) 16:30-18:00
場 所： 京都大学吉田キャンパス・法経済学部東館3階第3教室
報告者： 中川涼司(立命館大学国際関係学部教授)
テーマ： 「中国IT企業家の社会的形成モデルーサクセニアン・モデルの妥当性ー」

読後雑感 : 2010年 第8回

07. MAY. 10

中小企業家同友会上海倶楽部代表
東アジアセンター外部研究員(協力会理事) 小島正憲

1. 「現代中国女工哀史」
2. 「中国新声代」
3. 「中国人の本音」
4. 「感動中国！」

1. 「現代中国女工哀史」 レスリー・T・チャン著 白水社刊 2010年2月28日発行

副題 : 「将来の希望、恋、お金、あくなき向上心、そして故郷に残してきた家族への複雑な思い。よりよい暮らしを夢見て村を飛び出し、広東省の工業都市に出稼ぎに出た若き女性労働者たち一。“世界の工場”で働く彼女たちのたくましく、したたかな生きざまを等身大の視点で描いた傑作ドキュメント」。

この本の日本語題名は、中身を正しく表していない。この本の原題は、「Factory Girls : From Village to City in a Changing China」であり、素直に訳せば「変化する中国の出稼ぎ農民女工」というところだろうか。私ならば、本書の中身を正しく反映させ、「激変する中国のしたたかな出稼ぎ女工」というタイトルにする。しかしそのようなタイトルでは一般読者の耳目を集めず、たいして売れないだろう。やはり訳者や出版社が考えた、「現代中国女工哀史」の方が売れるにちがいない。しかしながらこの本の中からは、「哀しさ」という情景を探すのは難しい。むしろ女工たちがマルチ商法に手を出し儲けようしたり、男性たちを手玉に取ったりするなど、その「たくましさ」や「したたかさ」に驚かされる方がはるかに多い。副題からも「哀しさ」をうかがわせる文句は読み取れない。したがってこの本を「哀史」と表現するには、かなりの無理がある。また日本には大正末期、細井和喜蔵が書き残した「女工哀史」という書物がある。「現代中国女工哀史」という題名を見て、日本人はどうしてもその細井の名著を思い浮かべてしまう。訳者や編集者はおそらく日本人のその心情に訴えて、この本の売り上げの増大を図ったのではないか。このようなやり方はあまり進められたものではない。

またこの本が描いている女工の実態は、2003～7年までのものであり、現状(2010年現在)とはかなりかけ離れている。現在は超人手不足が進行し、完全な売り手市場になっており、いわば女工天国になっているからである。つまり描かれているのは「過去」の女工の姿であり、「現代中国」のものではない。「過去」の女工の姿を、わざわざ「現代」と名付けて、売り出すということは、日本の一般読者に誤った中国像を植え付けることになる。だから題名には「過去」のことであるということが、明確にわかるようにするべきであった。それが訳者や編集者の良心というものである。たしかにこの本に描かれている過去のことは、間違いではない。しかし上記のような理由で、この本は悪書の部類に入るのでないかと、私は考える。さらにこの本を日経新聞の2/28付けの書評欄が取り上げ、「中国現代史」の好著として紹介しているが、題名についてのコメントはない。

巻末の解説で、伊藤正(産経新聞中国総局長)氏は、「本書は民工の置かれた状況を描き、告発するのがねらいではない。そうではなく、民工自身が出稼ぎをどう考え、どんな生活をし、何を求めているか—を探り、従来軽視されてきた農民たちの主体性に光を当てることで、**出稼ぎがもはや暗黒の世界ではない**ことを明らかにしている」(P. 450)と書いている。ならばなぜ、題名を「女工哀史」としたのか、私には理解できない。

意外にも本文中に、著者レスリー・チャン氏が、出稼ぎ女工の一人の旧正月の里帰りに故郷へついていく場面がある。そこは湖北省の東部の黄梅の近くであった。偶然にも私は、17年前にその黄梅のすぐ近くの村で合弁工場を稼働させ、1年間ほど働いていたことがある。そこには、中国を代表する医・薬学者で「本草綱目」を著した李時珍の活躍場所で立派な記念館があり、黄梅近辺の村民はそれを誇りにしていた。また中国三大京劇のうちの一つと呼ばれる黄梅京劇の発祥の地でもあり、旧正月などには村民が集会所のようところでそれを観劇するのが常だった。さらにこの地には甲羅にふさふさとした緑の藻が生える亀が生息しており、これが村民の自慢の種であった。レスリー・チャン氏の本文の中には、これらのことがいっさい出てこない。私はついつい本当にこの人は現地に行ったのだろうか、疑ってしまった。

2. 「中国新声代」 ふるまいよしこ著 集広舎刊 2010年2月18日発行

・村上龍氏の推薦の弁 : 「現代中国の“旬”の声。故宮とスターバックス、というタイトルから何をイメージするだろうか。私たちは“現代中国”をほとんど知らない。隣国の巨人を、まず知ることから始めなければならない。本書は最良のガイドブックである」。

この本は、ふるまい氏が中国各界の著名人:18氏に行ったインタビュー集であり、約3年前(2007年5月～08年9月)、月間「論座」誌に連載されたものである。したがって激変する中国の現状を語るには、すでに賞味期限が切れているのではと思う。しかしながら、逆に3年前にふるまい氏と対談した著名人の中の誰が、その後の中国の変化を的確に予測していたかを検証するには、絶好の材料であるとも考える。またふるまい氏は、インタビューを思い立った理由として、序で、「中国で起こる事件、あるいは中国社会の出来事について、日ごろから中国社会に向けて発言している中国人識者の話を、そのまま日本の読者に伝えたい」、「現実を知る人たちの声をもっと日本の読者に伝えたい」と語っている。たしかに本文中で、この18氏は中国社会についての自分の考えを、ふるまい氏に率直に語っている。しか

しながら日本でも同様なように、識者の発言が現状を正しく反映しているとは限らない。やはりその発言を現場や歴史で検証してみなければ、その真偽は判断できない。ふるまい氏には、今回の発刊にあたって、インタビュー結果を再録するだけでなく、それらの発言を自らが検証し、そのコメントを付け加えてもらいたかった。出版までの3年間という歳月は、そのためにあったのではないだろうか。それでも本文中の18氏の発言は、なかなか読み応えのあるものである。

この本に登場する18氏の中で、私がよく知っているのは、経済学者の郎咸平氏である。本文中の対談は2007年4月のものであるが、そこで郎咸平氏は下記のように語っている。「(中国の)台頭は表層現象で、実際には土地だけ売って台頭しているんです。中国は大きい。中国が台頭している理由は国が非常に大きいからです。一人ひとりの生産力を発揮することができればものすごいことになるくらい大きい。購買力が増大すれば、影響力は高まり、それを大国の台頭と言っているんです。台頭の過程で注目すべきは、中国企業の競争力がそれに伴って上昇しているか、そこが心配なんです」と言い、「(中国で膨れ上がっているのは)国有企業、地方政府、そして不動産業です。そのほかの民営企業やほとんどの製造業は厳しい状況にある。…(略)。民営企業の財源はほとんどが地下経済で合法的なものではない。…(略)。中国は非常に栄えているように見えますが、それは表層だけでほとんどの民営企業はやせ細っている」と語り、その民営企業も「地方政府が腐敗していて、投資の回収が保障されないから」、民営企業の再投資意欲は低く、稼いだカネは株式市場や不動産に向いたり、アメリカへあるいは日本へと持ち去られることが多い。だから民営企業は萎縮し続けていると解説している。

そして郎咸平氏は、「企業家が企業をやりたくないから不動産を買う。…(略)。中国のすべての問題は結局腐敗に行き着く。不動産のバブル、株式市場のバブル、ビジネス環境の劣悪さ、物件法の施行不能、どれもが腐敗が原因です」と続け、胡錦濤政権が腐敗の取締りに躍起となっているから、クリーンで公平・公正なビジネス環境が整えられ、中国は第2段階の経済発展を果たすようになると、予想している。この対談がちょうど、陳良宇上海市党書記の汚職摘発の時期に行われていたことを考えれば、郎咸平氏が胡錦濤政権の腐敗取締りに大きな期待をしたことは納得できる。しかしながら、その後の3年間の歴史的経過の中で、腐敗が減少の方向に進んだとは言いがたく、むしろ拡大傾向にある。それでも中国経済は中国政府の破天荒の財政出動の結果、破格の成長を見せ、経済発展の第2段階に入った。皮肉にも結果的に、郎咸平氏の予測の半分は当たったわけである。

歴史学者の袁偉時氏は対談の中で、「(自分の原則は)自分が見たもの、確証を取れたものを書く」とであると語り、日本の明治維新の長所と欠点を述べ、それと比較して中国の洋務運動の失敗を取り上げている。さらに日本が明治維新のとき、政府が多くの反対を押し切って、国有企業を民間に払い下げ、それがその後の経済成長を推し進めたと述べ、今の中国でも国有企業が流出することになっても構わないから、どんどん払い下げよと主張している。

農村企業経営者の孫大午氏は、「違法資金調達」の罪で逮捕され、4年の執行猶予終了直後、この対談に臨み次のように語っている。「農村での企業の資金調達はきわめて難しく、95%以上の企業が民間からの(違法?)な資金調達でやりくりしている。もし司法機関が真剣に調査をすれば農村企業の95%の経営者が逮捕されるということである」。この対談後、すでに2年間に過ぎようとしているが、いまだに農村の金融機関は発達せず、親族間の貸し借りや地下金融がはびこり、果てはネズミ講まがいのものまで拡大しつつある。さらに孫大午氏は「1978年から88年にかけて、農村の発展が最も進んだ」と言い、「その後は地方政府の官僚化が進み、政府の各部門の権益が法制化されたため、農村が閉塞状況に陥った。いわば農村が許認可権限を握る共産党役人の飯の種になり、農村が疲弊したのである。農村における幾多の規制を緩和すれば、農村は大きく発展する」という趣旨の発言をしている。

社会学者の李銀河は、「現代中国では性のモラルが崩壊しつつあると言われていたが、中国の家族主義はまだまだ根強く、多くの人たちが家庭のために結婚している。中国の伝統文化、意識は家族主義的で、個人主義の社会ではない」と語っている。

国際問題評論家の邱震海氏は、日中関係について、「日本はイデオロギー的には西洋と同じかもしれませんが、アジア人の思考方法を持ち、アジア人の情感があり、アジア人の行動を取る。我われ東アジアの二つの民族の間で、これまでの恨みやこだわりを解決し、それを乗り越えることができれば、東アジアは運命共同体となることができる」と語っている。また中国脅威論については、「それは2重構造の脅威になっている。つまり中国の台頭が西洋社会に対して世界的に新たに勢力地図の書き換えを迫っていることと、そしてそれが共産党の支配する国であること」と解説している。さらに「中国の五輪開催はWTO加盟のごほうびだった。中国側も引き換えに人権の改善などを承諾した」と言っている。その結果、中国政府は労働契約法などの改正を行い、自らの首を絞めたのであり、西洋社会の思う壺に嵌ったのである。

チベット問題についても、「我われにとって大事なものは、現実的にはどうすればそれをもっと合理的にできるかということ。ダライ・ラマもチベットの独立を求めているのに、なぜ西洋の知識人がチベットの独立を主張するのか?この点が我われと西洋の間で明らかに違います。しかし、いかにチベットと中国の関係をもっと融和させていくか?中国はもっとチベット文化を尊重することはできないのか?チベットの人々一人ひとりが人格的、精神的な信仰の面でさらに十分な尊重を受けることはできないか?こういった課題をみなで考えなければならぬ」と語っている。

コラムニスト・文化人の梁文道氏のチベット問題に関する発言は、傾聴に値する。梁文道氏は、「チベットが将来独立するかしらないかに関わらず、まず我われは『独立してもしなくても我われは引き続きともに生きていかなければなら

ない。どうやったら、ともに落ち着いて、平和に、誰もが尊厳を持って暮らしていけるのか？』を認識すること、ぼくはこの問題に関心がある。その状態に達するためには、お互いにもっと多く理解しあわなければならないから、教育や社会制度のすべてを変えなければならない」と言い、「中国政府はダライ・ラマを罵るべきではない。しかし今問題なのは、ダライ・ラマを最も嫌っているのは北京の中央政府ではなくて、チベット自治区政府の、特にチベット人関係者だということです。彼らは、もしダライ・ラマが戻ってきて、チベットにある程度の自治がもたらされることになったら、自分たちの利益が損害を受けることを恐れている。また現在の時点で本当に困っているのは北京当局ではなくて、ダライ・ラマです。ダライ・ラマは存命中に問題を解決したがっている。というのも、ダライ・ラマが亡くなれば海外のチベット独立運動には象徴がいなくなり、ばらばらになってしまうからです。これこそが中国政府でチベット問題を語る『タカ派』が狙っていることです。しかしそこには代償がある。急進派が力を伸ばせば彼らはテロリスト化する可能性が大きく、事態はより複雑になる」と語っている。さらにチベットの農奴制にも触れ、「確かに昔のチベットは本当に農奴制度で80%の人が農奴であり、多くの人が悲惨な状況にあったことは間違いない。しかし彼らの多くがそれを問題視しておらず、信仰こそが大事だと考えていた。そんな農奴たちの多くが、自分とその所属する貴族や地主との関係を圧迫された関係とは考えていなかった。それと同時に、多くのチベット人が革命時に、自分は解放されたと思ったのも確かです。そして文革のとき、寺院の略奪や破壊に関わったのも漢人ではなく、多くがチベット人だった」と、その複雑な状況を述べている。

2007年香港特別行政区行政長官選挙立候補者という肩書きを持つ梁家傑氏は、「北京の指導者が国の中でどこかを実験場にして民主化を進め、民主選挙で生まれた政府との協力、相互の関係を学ぼうとするのであれば、香港は最良の選択肢です」と語っている。

ウェブビデオクリエイターの胡戈氏は、「中国の作品は戦争物以外、もう全部悲劇ばかり。とても悲惨な境遇にある人物がこれまた悲惨な目にたくさん遭って、非常に悲惨な人生を送る。そういうの、見たくないんです」と述懐している。

3. 「中国人の本音」 安田峰俊著 講談社刊 2010年4月19日発行

副題：「中国ネット掲示板を読んだ」

この本を読んでも、中国人の本音はまったくわからない。だからこの本を読むのは、時間の無駄である。

安田氏は、“はじめに”で「中国人の考え方をダイレクトに知るためにはどうすればいいのか。そんな疑問に応える手段として、この本では中国のネット上に残された庶民の書き込みに注目してみることにした」、「右や左のタテマエに色づけされた理想のイメージより、われわれは現実を知りたいのである。そんな眼で中国を見たい人は、ぜひ本書のページをめくってみてほしい」と書いている。そして最後に、「幸いなことに、この本で紹介してきたネット上のさまざまな書き込み内容からもわかるように、少なくない中国人たちはわれわれとの会話が成り立つ人々だ。匿名やハンドルネームで**気楽**にホンネを書き込むというインターネット文化を共有している人も多い」と結んでいる。

この本の大きな特徴は、掲示板に書き込まれている事例に具体的なものが皆無だということである。匿名やハンドルネームで登場している人物は決して**気楽**ではなく、周到に身分を秘匿しており、どこからも付け込まれないように具体性を消している。したがってそれらはすべて抽象的、仮想的にならざるを得ない。したがってそこでは具体的な現実はいっさい語られることはない。ネット上に現れるのは、無責任な流言飛語の類である。それを本音などと思うのは、まったくの誤解である。インターネット時代だからこそ、真実を掴むために保たなければならないのは実事求是の姿勢である。ネット上の情報を鵜呑みにするのではなく、それを自分の目で現場で確認すること、あるいは現場発の署名入りの良質の情報を入手できる体勢を確立しておくことが肝要なのである。

4. 「感動中国！」 谷崎光著 文芸春秋刊 2010年4月15日発行

副題：「女ひとり、千里をいく」… 楊逸さん大絶賛！「喜怒哀楽—表情豊かな母国と新たに会わされた」

この本はおもしろい旅行記である。私も少しひまになったら、この本をガイドブックにして、本の中で紹介されている街や村を歩いてみたいと思う。谷崎氏は、女ひとりで普通の観光客が行かない中国のすみずみにまで出かけ、その風景を歴史やその地で起きた最近のできごとを絡めて書き込んでいる。中でもそこかしこで起きる、悪徳観光商人や小悪徳一般庶民などのいさかきの描写は、思わず噴出すほどおもしろい。

最後まで一息で読んで、ふと気がついたのだが、私もこの2年間、暴動調査で中国のすみずみまで出かけてきたし、ついでのその近辺の調査観光を行ってきた。しかし谷崎氏の歩いた場所とは、ほとんどダブっていない。なぜなのかと思いながらもう一度、最初から谷崎氏の足跡を見直してみると、気がついた。谷崎氏は、現代中国では「紅色旅遊」として政府が勧奨している、毛沢東などの活躍を記念した場所には、まったく足を踏み入れているのである。私は「長征」の足跡を始めとして、それらをほとんど踏破し、調査記を書いてきた。したがって私と谷崎氏のものを両方合体させれば、完璧で良質な中国旅行のガイドブックになるのではないかと思った。

以上

【中国経済最新統計】（試行版）

上海センターは、協会会員を始めとする読者の皆様方へのサービスを充実する一環として、激動する中国経済に関する最新の統計情報を毎週お届けすることになりましたが、今後必要に応じて項目や表示方法などを見直す可能性がありますので、当面、試行版として提供し、引用を差し控えるようよろしくお願いいたします。 編集者より

	① 実質 GDP 増加率 (%)	② 工業付 加価値 増加率 (%)	③ 消費財 小売総 額増加 率(%)	④ 消費者 物価指 数上昇 率(%)	⑤ 都市固 定資産 投資増 加率 (%)	⑥ 貿易収 支 (億 _F)	⑦ 輸 出 増加率 (%)	⑧ 輸 入 増加率 (%)	⑨ 外国直 接投資 件数の 増加率 (%)	⑩ 外国直 接投資 金額増 加率 (%)	⑪ 貨幣供 給量増 加率 M2(%)	⑫ 人民元 貸出残 高増加 率(%)
2005年	10.4		12.9	1.8	27.2	1020	28.4	17.6	0.8	▲0.5	17.6	9.3
2006年	11.6		13.7	1.5	24.3	1775	27.2	19.9	▲5.7	4.5	15.7	15.7
2007年	13.0	18.5	16.8	4.8	25.8	2618	25.7	20.8	▲8.7	18.7	16.7	16.1
2008年	9.0	12.9	21.6	5.9	26.1	2955	17.2	18.5	▲27.4	23.6	17.8	15.9
2009年	8.7	11.0	15.5	1.9	31.0	1961	▲15.9	▲11.3	▲14.9	▲16.9	27.6	31.7
2008年												
3月	10.6	17.8	21.5	8.3	27.3	131	30.3	24.9	▲28.1	39.6	16.2	14.8
4月		15.7	22.0	8.5	25.4	164	21.8	26.8	▲16.7	52.7	16.9	14.7
5月		16.0	21.6	7.7	25.4	198	28.2	40.7	▲11.0	38.0	18.0	14.9
6月	10.4	16.0	23.0	7.1	29.5	207	17.2	31.4	▲27.2	14.6	17.3	14.1
7月		14.7	23.3	6.3	29.2	252	26.7	33.7	▲22.2	38.5	16.3	14.6
8月		12.8	23.2	4.9	28.1	289	21.0	23.0	▲39.5	39.7	15.9	14.3
9月	9.9	11.4	23.2	4.6	29.0	294	21.4	21.2	▲40.3	26.0	15.2	14.5
10月		8.2	22.0	4.0	24.4	353	19.0	15.4	▲26.1	▲0.8	15.0	14.6
11月		5.4	20.8	2.4	23.8	402	▲2.2	▲18.0	▲38.3	▲36.5	14.7	13.2
12月	9.0	5.7	19.0	1.2	22.3	390	▲2.8	▲21.3	▲25.8	▲5.7	17.8	15.9
2009年												
1月				1.0		391	▲17.5	▲43.1	▲48.7	▲32.7	18.7	18.6
2月		(3.8)	(15.2)	▲1.6	(26.5)	48	▲25.7	▲24.1	▲13.0	▲15.8	20.5	24.2
3月	6.1	8.3	14.7	▲1.2	30.3	186	▲17.1	▲25.1	▲30.4	▲9.5	25.5	29.8
4月		7.3	14.8	▲1.5	30.5	131	▲22.6	▲23.0	▲33.6	▲20.0	25.9	27.1
5月		8.9	15.2	▲1.4	(32.9)	134	▲22.4	▲25.2	▲32.0	▲17.8	25.7	28.0
6月	7.9	10.7	15.0	▲1.7	35.3	83	▲21.4	▲13.2	▲3.8	▲6.8	28.5	31.9
7月		10.8	15.2	▲1.8	(32.9)	106	▲23.0	▲14.9	▲21.4	▲35.7	28.4	38.6
8月		12.3	15.4	▲1.2	(33.0)	157	▲23.4	▲17.0	▲2.05	7.0	28.5	31.6
9月	8.9	13.9	15.5	▲0.8	(33.4)	129	▲15.2	▲3.5	10.6	18.9	29.3	31.7
10月		16.1	16.2	▲0.5	(33.1)	240	▲13.8	▲6.4	▲6.2	5.7	29.5	31.7
11月		19.2	15.8	0.6	(32.1)	191	▲1.2	26.7	10.0	32.0	29.6	34.8
12月	10.7	18.5	17.5	1.9	(30.5)	184	17.7	55.9	9.7	-44.6	27.6	31.7
2010年												
1月				1.5		142	21.0	85.6	24.7	7.8	26.0	29.3
2月		(20.7)	(17.9)	2.6	(26.6)	76	45.7	44.7	2.5	1.1	25.5	27.2
3月	11.9	18.1	18.0	2.4	26.3	▲72	24.2	66.4	28.1	12.1	22.5	21.8

- 注：1. ①「実質 GDP 増加率」は前年同期（四半期）比、その他の増加率はいずれも前年同月比である。
 2. 中国では、旧正月休みは年によって月が変わるため、1月と2月の前年同月比は比較できない場合があるので注意されたい。また、()内の数字は1月から当該月までの合計の前年同期に対する増加率を示している。
 3. ③「消費財小売総額」は中国における「社会消費財小売総額」、④「消費者物価指数」は「住民消費価格指数」に対応している。⑤「都市固定資産投資」は全国総投資額の86%（2007年）を占めている。⑥—⑧はいずれもモノの貿易である。⑨と⑩は実施ベースである。

出所：①—⑤は国家统计局統計、⑥⑦⑧は海関統計、⑨⑩は商務部統計、⑪⑫は中国人民銀行統計による。